

うま ひと じゆう しち 馬人十七

南大隅町根占みなまおおすみ ねじめに、昔、山崩れがあったという言い伝えがあります。文献などに記録がなく、いつの時代のことか分かりませんが、次のような話が伝えられています。

横別府よこべつり(南大隅町根占)の本屋敷ほんやしきに、かつて、一つの集落がありました。

ある日のこと、どの家でもゆつくりくつろいでいました。というのは、その日は、昔からのならわしで農作業などの仕事をせずに休むことになつていたからです。ところが、一軒だけいつもと同じように忙しく働いておりました。そこは豪農で多くの田畑を持ち、下男や下女を使つていました。主人は、「ゆつくりするのは晩になつてからじゃ。昼間に遊んじゃならん」と、朝早くから下男たちを連れて田んぼの草取りをしていました。

お昼近くになつたとき、突然、村の中で、「山が崩るつど。早はや、みんな逃げろー」という叫び声こゑがあがりました。さらにまた、「神様のお告げじゃー。山が崩るつど、逃げろつち言やつど。早く向こうの丘に登れー」と叫んでいます。村にいた人々は何



もかも放り出して、高いところへ向かつて走り出しました。間一髪かんいつぱつ、轟音ととんとともに山が崩れ始め、土石流土石流が麓かみに押し寄せました。それはあつという間の速さでその集落を押し流し、さらに近くの田畑を覆いつくしました。田んぼに出ていた豪農の主人や下男たちは逃げる暇もなく、このとき、馬と人、合あわせて十七の命が失われたと伝えられています。

助かった人々は、やがて、山本やまもと、大久保おおくぼに移り住み日常生活を取り戻しました。土石流の流れてきたところは本屋敷ほんやしき、元大久保もとおおくぼと呼ばれるようになり、田畑には今も大きな石が残っていますが、山崩れの言い伝えを知る人は少なくなりました。

なお、当地区では、毎年、旧暦一月六日に西原祭にしはらまつりと言つて、非業ひげつの死を遂げた人の霊たまを慰めることとしていますが、この山崩れで失われた命も吊つらつていっていることです。

(原話)『話―はじめの昔ばなし』・南大隅町 大久保弘行

文／有馬英子 絵／二石綱夫